

## 新漢語と薬名

### —台湾における医学用語の一環として—

王 敏東・仙波 光明・岸江 信介

#### **Neo-Chinese and Names of the Medicine An Important Part of Taiwan's Medical Terms**

Ming-tung WANG; Mitsuaki SENBA; Shinsuke KISHIE

#### **Abstract**

The medical terms have marked themselves out in the whole campaign among the exchanges between Chinese and Japanese words and phrases, partly because that long since the traditional Chinese medicine set its foot in the Japanese soil, the related terms had come along then. On the other hand, a neo-Chinese campaign inclusive of medical terms was launched in Japan on a large scale in early modern age when Chinese words also found their way to spread to Japan.

Under such an environmental background, Taiwan has been the key platform because that the presence of the Japanese neo-Chinese words started with the medical terms. And, much of the Japanese neo-Chinese mixed with Chinese words directly links to the medical care development devoted by the Japanese when they colonized Taiwan.

Wang (2005-2006) delivered a series of researches on medical terms related to their organs, to the names the public health and the surgery currently used in Taiwan. All these medical terms closely connect to the neo-Chinese created in Japan.

In addition, among the medical terms the medicine names are a part

which cannot be ignored. So far, only medicine names that carry a quotation mark “Opium”“Vitamin” in the dictionary are illustrated specifically. There is still room waiting to be filled by specific researches on an overview of terms related to the medicine, the medicine names created in the neo-Chinese, or the Chinese medicine name with Japanese origination.

On this account, this study elaborated on the medicine names. Based on the connection between Chinese and Japanese, the following points are discussed:

1. Overview on words and phrases related to medicine.
2. Names of the Chinese medicine.
3. Names of the western medicine.
4. The position of the medicine names among the medical terms.

Moreover, further probe to why there are hardly new Chinese words found in the medicine names are carried out.

### 1、はじめに

人間の生、老、病、死はいずれも医学と深くかかわっている。医学の多様な技術の中で、古来最も広く用いられてきたのはやはり薬であろう。現代のような先進の手術が可能となる前は、薬が唯一の治療法となる病気が多かったと考えられる。しかし、1つの薬が実用化され、副作用に至るまでの適切な利用法が完全に究明されるまでには、多大な努力が必要とされるのが常である。古代中国の神農の話から、現代に至るまで、たとえば結核、エイズやSARSに有効に対抗できる薬への道のりはまだまだ遠そうである。正に山崎(1991)が述べた「近代医薬の開発には、長い年月と莫大な経費、そして数知れぬ研究者たちの苦勞の積み重ねが必要とされる。その結実は、人類をさまざまな病苦から解放する」の通りである。

ところで、日中語彙の交流について考える際、医学用語が大きな役割を果たしていることが分かっている。古い時代より中国起源の漢方または関連用語が日本に入り、近世以降は逆に、医学用語を含む日本起源の新漢語が中国語に移入された、という二方向の流れが明確に存在するからである。

新漢語、中でも台湾における日本起源の医学用語は、その中でも大きな意味

をもっている。その理由としては、日本における新漢語創出の先陣を切り、蘭学の勃興をもたらした『解体新書』（1774）において用いられたのは医学用語群であることや、台湾における日本起源の新漢語の定着が、日本人が台湾統治開始後直ちに医療政策（公衆衛生、医療体制や医学教育など）を導入した関係で、医学用語から始まったことがあげられる。

台湾における日本起源の医学用語について、王（2005～2006）は器官名、公衆衛生に関する語（伝染病名など）、手術用語などについて論じてきた<sup>1</sup>。これらの医学用語の中で、日本起源の新漢語はいずれも目立った存在である。

この医学用語の中には、薬名も多く含まれている。薬名関係の語については、これまでたとえば「アヘン」、「ビタミン」、「ペニシリン」など個別に取り上げられたものが辞書などの資料に散見される<sup>2</sup>が、薬にかかわる語全体、新漢語である薬名、また中国語に「逆輸入」された新漢語である薬名についての論考が見当たらない。

本論は、以上のような状況に基づき、薬名について論じたものである。日中両語における関連性を基盤とし、以下のように論を進めていく。

- 1、薬にかかわる語の概観。
- 2、漢方薬名。
- 3、西洋医学における薬名。
- 4、医学用語というジャンルにおける薬名の位置付け。

そして、最後にどうして薬名に新漢語が少ないかを分析する。

## 2、薬にかかわる語の概観

本節では、『分類語彙表』（1964）「1.436 毒薬・薬品」に挙げられている100語を、「薬」とかかわる語例として検討する。具体的には、「語構成」、「語種」、「日中同形語かどうか」や「使用頻度」などの面から観察する。

まず、『分類語彙表』（1964）「1.436 毒薬・薬品」に掲載されている100

---

1. 詳細は参考文献にあげる王敏東（2005～2006）を参照。

2. たとえば、樺島等（1984）に「ビタミン」が取り上げられており、その起源及び大正・昭和期の用例を1枚弱のスペースで紹介している。また、立川（1976）などの医学用語の辞書に見出し語として立てられている。

語を、「薬」を含むもの(35語)、「剤」を含むもの(17語)<sup>3</sup>、また、「薬」「剤」のいずれも含まないもの(48語)に分ける。更に「～薬」または「～剤」における「～」に当たる部分を意味的に分析してみれば、形容的なもの(たとえば「良薬」、「新薬」)、その薬の使用法(たとえば「内服薬」、「外用薬」)、その薬の効果が主に作用する部位(たとえば「目薬」、「胃薬」)、薬の効き目(たとえば「解熱剤」、「鎮痛剤」、「強心剤」)などに分けられる。一方、「薬」または「剤」を含まない語は、「本草」、「頓服」、「軟膏」、「絆創膏」、「ひまし油」、「肝油」、「酒精」の7語を除くと、「毒消し」、「虫除け」、「のみとり」、「猫いらず」のような、その薬の効果、作用などを表わすものと、外来語のもの<sup>4</sup>に分けられる。

語種の面からこの100語(うちに「水薬(すいやく・みずぐすり)のような語は2語と計算する)を見れば、和語24語、漢語51語、外来語22語と混種語3語となっている。和語のものはすべてこういう薬の効果・作用を表わすものばかりである。逆に、具体的な薬名が、すべて外来語に含まれるのも注目値する。このような薬名は、構成された要素に「薬」か「剤」を含まないため、「形容的なもの」、「使用方法」、「効果が作用する部位」、「効き目」などを字面から読み取ることが不可能である<sup>5</sup>。

また、現代中国語でも使用されているいわゆる日中同形語では、「薬品」、「毒薬」、「良薬」、「内服薬」、「胃薬」、「粉薬」、「絆創膏」、「肝油」、「酒精」、「殺虫剤」、「DDT」、など計24語<sup>6</sup>が含まれている。

『分類語彙表』(1964)「1.436 毒薬・薬品」に収録している100語について全体的にまとめると、薬にかかわる語に一般語が多く、漢方関係の語が「本草」という1語だけである、薬名がすべて外来語である、などのことが観察できた。

上記のことを整理すると、表Iのようになる。ただし、紙幅の制限で、本稿

### 3. 『大辞泉』

<http://dic.yahoo.co.jp/bin/dsearch?index=07021700&p=%BA%DE&dtype=0&stype=1&dname=0na&pagenum=1>「〔接尾〕助数詞。調合した薬を数えるのに用いる。」

4. 中には「BCG」のようにアルファベットで表記されるものもある。

5. たとえばアスピリンの原語である aspirin の「in」は(ドイツ語)薬品名を表わしている部分であるが、日本語(または中国語)により音訳されると、その元の意味を読み取ることはできなくなった。

6. 他に一時中国語と同じ表記を用いた「鴉片(アヘン)もあるが、詳細は後述する。

で主に検討する薬名<sup>7</sup>以外、「1.436 毒薬・薬品」という項目の内部に更に分けられている 11 のグループの語群については各グループの最初の語を代表例として表に入れることにした。また、参考のため、表 I に入れた各語の使用頻度を右の欄に掲示する<sup>8</sup>。なお、語の順番は『分類語彙表』の提示順にしたがう。

表 I

	語を構成する要素について			語種				日中同形語かどうか		使用頻度	
	「薬」を含む	「剤」を含む	「薬」または「剤」を含まない	和語	漢語	外来語		同形	同形ではない	現代雑誌九十種の語彙調査において使用率が0.014パーミル以上	天野等 (2000)
						カタカナ表記	アルファベット表記				
薬品	○				○					○	2385
劇薬	○				○						147
良薬	○				○					○	71

7. 「アスピリン」と同じグループに「サッカリン」、「ズルチン」という人工甘味料、「モルヒネ」というアヘンに含まれるアルカロイドの主成分、「ニコチン」という植物塩基と、「ヒロポン」という覚醒剤も入っているが、本稿が主に検討する主旨と離れたので、表 I に入れないことにした。

8. 天野等 (2000) の頻度 (表 I における最も右の欄) に関しては、他に「ばんそうこう 75」「バンソウコウ 10」、「あへん 19」「阿片 26」「鴉片 6」もある。

内服薬	○			○			○			45
目薬	○		○							149
錠剤		○		○						273
絆創膏			○	○						8
薬名	アスピリン		○		○					80
	ペニシリン		○		○				○	97
	アヘン		○		○					288
ひまし油			○				○		6	
B C G			○				○		60	
アルコール			○		○					2385
防虫剤		○		○						80

### 3、漢方薬名

前節（「2、薬にかかわる語の概観」）で検討した薬にかかわる語に、中国から伝来した「本草」も入っていた。中国における伝統医学の一環として、漢方薬も古くから日本に入った。『日本国語大辞典』（2001）にも提示されているように、漢方薬名のたとえば「靈芝」は『菅家文草』、『右記』、『若木集』など、「甘草」は『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』、『延喜式』、『色葉字類抄』など、日本の古典文献に用いられている。更に日本でも『大和本草』（1709）などが作られ、本草学、博物学、物産学に発展し、中国からの影響が大きい<sup>9</sup>。なお、日本科学史学会（1970：357～358）は、明治・大正期における「薬材化学薬類及爆発薬」として、人参、茯苓、黄連、大茴香などの輸出・輸入の詳細

#### 9. たとえば『大辞泉』

<http://dic.yahoo.co.jp/bin/dsearch?index=17149100&p=%CB%DC%C1%F0%B3%D8&dtype=0&stype=1&dname=0na&pagenum=1>に「本草学 日本には平安時代に伝わり、江戸時代に全盛となり、中国の薬物を日本産のものに当てる研究から博物学・物産学に発展した。」とある。

(量・金額(円))を掲載している。現代に至っても、漢方を取り入れていることをアピールした化粧品や健康食品が広く出回っている。いずれも、漢方またはその薬名は日本に浸透していることを物語っている。

一方、中国の方でも、「阿斯匹靈」(または「阿斯匹林」、アスピリンのこと)、「盤尼西靈」(ペニシリン)などの西洋医学における薬に加え、「中薬」は従来根強い存在である。特に中国人の薬膳などの食生活に馴染み、薬名というより一般語彙に近い「中薬名」が多い。これらの語には、「人參」、「靈芝」、「当帰」、「薏仁」、「蘆薈」など、二字語が多い。

#### 4、西洋医学における薬名

日本における蘭学の勃興は医学(解剖学)を嚆矢とする。したがって、いわゆる新漢語は、『解体新書』(1774)をはじめとする数多くの蘭学書に用いられた用語——特に医学用語<sup>10</sup>に多い。日清戦争における敗戦国となった中国(清)は、19世紀末よりこれらの新漢語を多く学んで自国に持ち込んだ。台湾は日本における初の殖民地となり、新漢語だけでなく、日本語自体が「国語」となった。したがって、医学用語における器官名、公衆衛生にかかわる語、手術用語など、日本起源の新漢語(日中同形語)が多い。ただし、医学用語において重要な薬名となると、何故か新漢語(日中同形語)が少ないようである。その原因を探るため、以下「アヘン」、「アスピリン」、「ペニシリン」という西洋医学における薬名を例として、それぞれ語誌的に検討してゆく。「アヘン」、「アスピリン」、「ペニシリン」を取り上げたのは、三者ともよく知られた薬で、しかも新漢語の形成・伝播が最も盛んであった19世紀後期と深くかかわっているからである。

##### 4-1、「アヘン」

ケシからアヘンを採取し薬として用いることについて、西洋では紀元前にすでにその形跡がある。それに対して、中国でよく用いられたのは16世紀の末頃だという<sup>11</sup>。しかし、科学的にその効用について解明されたのは19世紀初頭のことである<sup>12</sup>。現在、依存すると中毒に至り、更に命が奪われることさえある、

10. たとえば漢方の五臓六腑にない「腺」(または「扁桃腺」、「甲状腺」など「腺」を含む語群)など。

11. 山崎(1991:23~27)。

12. 山崎(1991:28)、江(2004:147)など。1805年にドイツのフリードッヒ・ウイヘルへ

というその性質から、麻薬とされている。そもそも近世中国と西洋との正面衝突の幕を開けたのが他ならぬアヘン戦争（1841）である。戦争をもたらした大きな原因は当時大量に中国に持ち込まれたアヘンが中国で広く乱用されたことであつた。この戦争がきっかけで、中国は前代未聞の動乱に陥り、とうとう清朝廷の滅亡にまで導かれた。したがって、アヘンは中国人にとってことによくない印象がつかまとう。

その名（表記）については、『本草綱目』（卷二十三）に「阿芙蓉綱目釈名時珍曰俗作鴉片名義未解或云阿片音称我也以其花色似芙蓉而得此名」とある。『四庫全書』には「鴉片」が54例、「阿片」が3例見られる。イギリス人宣教師医者である合信の『醫學英華字釋 MEDICAL VOCABULARY IN ENGLISH AND CHINESE』（1858）には「鴉片」、民国以降代表的な医学辞書である『高氏医学辞彙』（1939）では「鴉片、阿片」と提示されている。また、台湾における日本統治時代の資料である『台湾医学会雑誌』<sup>13</sup>（1902～1945）では「阿片」が123例、漢文『台湾日日新報』<sup>14</sup>（1905～1911）には「阿片」が1226例で「鴉片」が239例、『台湾時報』<sup>15</sup>（1898～1945）には「阿片」が10例で「鴉片」が9例、『台湾人物誌』<sup>16</sup>に「阿片」が511例で「鴉片」が1例確認できた<sup>17</sup>。現在では、中国大陆・台湾いずれも「鴉片」と表記するのが一般的である。「鴉」を用いることになった過程には、単に音を表わすのみならず、乾燥され粉にしたアヘンが黒っぽい灰色であることや、中国人が従来鴉という動物にいいイメージを持たないことが関連していると考えられる。

日本では現在カタカナで表記されているのが一般的であるが、かつては中国からの影響か、「鴉片」もしくは「阿片」と表記されたこともあつた。たとえば『医語類聚』（1872）、『袖珍医学辞彙』（1886）、『常識医語集』（1947）、

ルム・セルチュルーナがはじめてアヘンからモルヒネを取り出し、非常に効き目のある鎮痛薬として用いられたという。ちなみに、モルヒネという名は眠りの女神モルフィウスの名に因んだという。

13. 台湾における最初の医学専門誌である。1902年に日本人によって作られた。

14. 『台湾日日新報』は台湾における日本統治時期において刊行された最大の官報である。

15. 『台湾時報』は台湾総督府が台湾を統治していた時期に刊行した日本語の機関誌である。

16. 台湾における日本統治時代の人物の略歴をあつめた資料である。

17. 上掲の資料ではいずれも仮名表記の「アヘン」が見当たらない。また、『台湾医学会雑誌』では「鴉片」も見当たらない。



『常用医語事典』（1968）や『学術用語集薬学編』（2000）に「阿片」という表記が収録されている。また直前にあげた台湾における日本統治時期に見られる「鴉片」「阿片」の用例からも分かるように「阿片」の方が多かった。「鴉」より「阿」の方が優勢であるのは「阿」が比較的原音に近いこと、「阿」が筆画数が少ないことなどが原因だと考えられる。

一方、西洋原語について、ケシの液汁をオピウムと名付けたのはギリシア人で<sup>18</sup>、岩月（2001：46）は「阿片 opium はギリシャ語の opós（野菜の汁）の縮小形 opion からきた語で、元来は poppy-juice（ケシの汁）を意味した。」と述べている<sup>19</sup>。岩月（2001：46）はまた「中国で阿片または鴉片と書かれたのは、これらの中国語の発音「オピン」が opium に近いための音訳である。」<sup>20</sup>と主張しているが、山崎（1991：27）は「中国語の阿片というのはアラビア語のアフィューンにあたる阿芙蓉に由来する」の説を挙げている。

#### 4-2、「アスピリン」

世界で最初に合成された医薬品であるアスピリンは代表的な消炎鎮痛剤の1つで、非ステロイド性抗炎症薬の代名詞、薬の王様とまでされている薬である<sup>21</sup>。「アスピリンは19世紀末に発売されて以来、最もポピュラーな抗炎症剤・鎮痛剤として現在に至るまで使われ続けており、その圧倒的な生産量は他の薬剤の追随を全く許さない」<sup>22</sup>とも言われる。

「アスピリン (aspirin)」という言葉について、岩月（2001：33～34）などによれば、もともとはドイツのバイエル (Bayer) 社の商標名で、1899年 Dresser が命名したことが分かっている<sup>23</sup>。有効成分のアセチルサリチル酸

18. 山崎（1991：24）。

19. また、立川（1976：399）もその語源について「opium n 阿片 [ラ opium < ギ opion ケシの汁, アヘン (opos 汁, の指小語)]」と似たような説を挙げている。

20. また杉本（2005：607）にも「〈阿片 opium〉（中国での音訳）」とある。

21. wiki、<http://wwwl.accsnet.ne.jp/~kentaro/youki/aspirin/aspirin.html>

22. <http://wwwl.accsnet.ne.jp/~kentaro/youki/aspirin/aspirin.html>

23. ただしその発売は1897年だという説もある

（<http://wwwl.accsnet.ne.jp/~kentaro/youki/aspirin/aspirin.html> または

[http://www.bayer.com.tw/news/content.asp?new\\_id=262](http://www.bayer.com.tw/news/content.asp?new_id=262)、

<http://general.chemistry.pu.edu.tw/aspirin/>）。また、アスピリンが19世紀に現われた経緯について、他に立川（1976：60）、山崎（1991：2～3）、江（2004：147）、王（2005：

(acetylsalicylic acid) はバラ科の植物 *Spiraeulmaria* の花の中に含まれているが、化学的に合成されたもので、a- (否定) + spirae + in、すなわち「spirae からではない薬」という意味から aspirin と名付けられたという。その後、「第一次世界大戦でドイツが敗北した際に賠償の一環として連合国に取り上げられ、各社で自由に使ってよい薬品名ということになった」<sup>24</sup> のである。もっともその由来に関しては、acetyl-の a-と Spirsauere (サリチル酸) の spir-から造られたとの説もある<sup>25</sup>。

その中国語例または日本語例として、たとえば、中国側の資料である『丁氏医学叢書 中外病名対照表』(1919)に「アスピリン Aspisin 阿匹林」という記録が残されている。この例から、この薬名の表記に関しては、「日本と中国における当時の訳は現在通用の表記(音訳語)に近い表記が使われており」、「当時の日本語と中国語との関連は薄い」ことが観察できた。

ちなみに、台湾における日本統治時期の『台湾医学会雑誌』、漢文『台湾日日新報』、『台湾時報』、『台湾人物誌』ではいずれも関連の用例が見当たらない。一方、日本において『常用モダン語辞典』(1933)、また戦後の『常識医語集』(1947)に「アスピリン」とある。

#### 4-3、「ペニシリン」

ペニシリンはアオカビによって発見された最初の抗生物質である。本格的な研究が進んだのは1930年代末から40年代はじめにかけてのことであって、折しも原子爆弾やレーダーと並ぶ「第二次世界大戦中の3大発明」とも呼ばれた<sup>26</sup>。その名「penicillin」は1929年にイギリスの細菌学者フレミング(Alexander Fleming, 1881~1955)によって作られた<sup>27</sup>。それは「<近代ラ Penicillium ペニシリウム属, アオカビ属<ラ penicillus または penicillum 画筆<peniculus はけ, (先端が房状になっている) 小さい尾 (penis 尾, の指小語) ; その小柄の先が房状になっていることから」とされている<sup>28</sup>。「Penicillium」の中国語

66) なども触れている。

24. <http://www1.accsnet.ne.jp/~kentaro/youki/aspirin/aspirin.html>

25. 岩月(2001: 33~34)。

26. 江(2004: 169)。

27. 立川(1976: 428)。またその発見について石坂(1981)、江(2004: 169)、王(2005: 159~162)も触れている。

28. 立川(1976: 428)。

における早期の訳例として『医学名詞彙編』（1931）の「筆頭菌」や、『高氏医学詞彙』（1939）の「Penicillium 青黴属、筆毫黴菌」があげられるが、いずれも意識である。

日本においては、昭和18年（1943）7月、当時の厚生大臣小泉親彦が陸軍軍医学校の卒業式にあたる祝辞で「ペニシリンという新薬剤についてアメリカの二十数ヶ所の軍需工場で大産生産が開始された」と述べたのが、恐らく日本でペニシリンについて語られた最初の例だといわれている<sup>29</sup>。また、その研究・開発は「昭和18年12月ドイツから送られてきた医学雑誌中のペニシリンの記事を見た陸軍軍医学校の一軍医少佐の慧眼から始まった。」<sup>30</sup>という。一般の国民に紹介されたのは翌昭和19年1月27日の「敵米英最近の医学界 チャーチル命拾い ズルホン剤を補うペニシリン」という朝日新聞の記事が最初のような。記事に「最近イギリスの研究所で創製されたペニシリンと呼ぶ新薬」とある。ただし、その名前については、当時適性語（英語）の「ペニシリン」

がけしからんという陸軍の意見で、「碧素<sup>へきそ</sup>」という名で呼ばれていたようだ。

現在では死語となっている「碧素」であるが、ここにはペニシリンがアオカビを原料とした抗生物質であったことをうかがわせる意識の跡が見られる。「碧素」と名付けられたのは昭和19年のことで、命名者は第一高等学校の生徒であり、ペニシリン研究の助手でもあった後藤寛だという<sup>31</sup>。ちなみに、現在中国では「青黴素」が広く用いられているが、これはちょうど「碧素」と同じような発想に基づき訳された語だと考えられよう。

しかし、漢字により表現された「碧素」は台湾における日本統治時期の資料である『台湾医学会雑誌』、漢文『台湾日日新報』、『台湾時報』、『台湾人物誌』などには見当たらない<sup>32</sup>。

#### 4-4、西洋医学における薬名「アヘン」、「アスピリン」、「ペニシリン」

29. 山崎（1991：159～160）。ただし、山崎は角田房子（『碧素・日本ペニシリン物語』新潮社）を引用している。

30. 「碧素（ペニシリン）」と「科学朝日」（2002）。

31. 山崎（1991：155～156）。ただし、山崎は角田房子（『碧素・日本ペニシリン物語』新潮社）を引用している。

32. また関連の「ペニシリン」、「盤尼西林」、「盤尼西靈」も見当たらない。

### のまとめ

「4-1」～「4-3」では西洋医学における薬名の「アヘン」「アスピリン」「ペニシリン」について検討してみた。「アヘン」は新漢語が大量に生まれた時期である19世紀末よりも数百年も前から中国に広まっていたため、漢字による表記があり、日本にも伝わっている。「アスピリン」は19世紀の最後の年にドイツバイエル社の商標名として世に問われた。薬がビジネスであるという側面を示したと同時に、特定の商品名が一般語として広く用いられる例の1つともなった<sup>33</sup>。それが原因か、20世紀初期の資料にすでに現在の語形に近い日本語と中国語の用例が見られた。「ペニシリン」についてはその発見・究明時期がアヘン、アスピリンの一般化時期より遅い20世紀の前期であった。戦争のためか、日本に広く知られたのは随分あとのことで、当時の日本の国情から「ペニシリン」でなく、「<sup>へきそ</sup>碧素」という名も生まれたが、結局定着には至らなかった。

### 5、医学用語というジャンルにおける薬名の位置付け

漢方における薬名は漢方とともに古くから日本に入り、今でも使われているものが多い。それに対して、西洋医学における薬名はどれも日中の関連が薄いように思われる。本稿で検討した3語のうち、「アヘン」を除く「アスピリン」、「ペニシリン」は日中両語がそれぞれ関連なく直接西洋語に対応したかと考えられる。もしそうだとしたら、医学用語の他の語群、たとえば器官名、公衆衛生に関する語、手術用語などとは随分異なる様相を示しているといっている。何故なら西洋医学は、近世以来日本、中国、そして台湾の3ヶ所における語彙の交流に大きな変化を与えており、多くの日本起源の新漢語が中国大陸や台湾に伝えられた中に、医学用語がかなりの比重を占めているからである。そんな中で薬名に関しては、日本起源の新漢語で中国語に流入したものが滅多にないのである。

本稿で検討した「アヘン」、「アスピリン」、「ペニシリン」は、薬として人類に使用された時期はそれぞれ異なっているが、いずれも19世紀末という新漢語が多く発生し、更に中国語に流入した時期と深くかかわっている。

アヘンが中国または日本に知られたのはまだ日本が一方向的に中国から文化・

33. このような意味拡大の例に他に「ピンポン」「ウォークマン」などがあげられる。

用語などを多く導入していた時期であった。したがって、この語の日中関係は中国語が日本語に影響を与えるという従来の漢語のパターンである。

「アスピリン」は19世紀の最後に商品名として作られた。のち日本語のカタカナで音訳された表記例と、中国語の漢字による音訳表記例が20世紀前期の中国語の資料で見られた。この薬名については最初から日中間の関連が希薄であることが示されている。

ペニシリンは、西洋においては20世紀前期に発見されたが、日本に知られたのは第二次大戦終戦のわずか数年前のことである。最初に英語名が紹介されたが、1944年に意識語の「碧素」が作られた。しかしこの「碧素」、当時まだ日本の殖民地であった台湾ではどうも用いられた形跡が見られない。

このように、「アヘン」、「アスピリン」と「ペニシリン」という3語の日本及び中国での命名状況を見れば、日本起源の新漢語が中国語に影響を与える時期を推測できると考えられる。つまり、19世紀最後の数年に西洋で用いられた西洋の薬名「アスピリン」と、終戦前の数年に日本に知られた「ペニシリン」、または日本で作られた「碧素」は中国語にほとんど影響を与えていないと分かる。1895～1945年の間日本の殖民地であり、医学においても全面的に日本の影響を受けていた台湾でも、薬名に関しては日本語からの影響が見えない。日本起源の新漢語の発生または中国語への影響には時期が大きく関与していると考えられる。新漢語の交流を左右する時期は19世紀末・20世紀初頭の数年である。また、この時期という要素はどうもジャンルという要素より影響力が強いと考えられる。

## 6、参考文献

- ・王敏東、蘇仁亮「台湾における新漢語の受容—手術用語の「(～)切開(術)」 「(～)切除(術)」 「(～)切断(術)」を中心に—」, (投稿中)。
- ・阿斯匹靈的製造 (靜宜大學應用化學系翁榮源教授指導)  
<http://general.chemistry.pu.edu.tw/aspirin/>
- ・「薬の王様アスピリンの物語」  
<http://www1.accsnet.ne.jp/~kentaro/youki/aspirin/aspirin.html>
- ・台湾拜耳新聞 (2006) [http://www.bayer.com.tw/news/content.asp?new\\_id=262](http://www.bayer.com.tw/news/content.asp?new_id=262)
- ・ <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%82%B9%E3%83%94%E3%83%AA%>

E3%83%B3

- ・王敏東、蘇仁亮「從「瘟疫」/「黑死病」到「鼠疫」—中日疾病名稱考源—」, 『或問』11, (印刷中)。(日本)
- ・王敏東「從“免疫”一詞探討日據時期臺灣文獻在借自日語的外來詞上所扮演的角色」『語文建設通訊』84, 2006年6月(印刷中)。(香港)
- ・王敏東、蘇仁亮「「インフルエンザ」及び「流行性感冒」の語誌—19世紀末における日中語彙の交流例として—」『日本学刊』第10期, 2006年6月(印刷中), 香港日本語教育研究会。(香港)
- ・王敏東「医学名詞「結核」小考」『語文建設通訊』83, 2006年4月, 49-52頁。(香港)
- ・王敏東「新漢語の中日交流について—公衆衛生に関する幾つかの名称が台湾における使用状況を中心として—」, 漢字訳語と漢字文化諸言語の近代語彙の形成, 2006年3月, ソウル
- ・王敏東「和字「腺」の語構成における位置」『或問』, 2005年11月, 65-73頁。(日本)
- ・Wang Ming-tung, From Medical Terms “Gland” to Search Development Locus of Taiwan Medicine: The 11 International Conference on the History of Science in East Asia, 2005年8月, Munich
- ・王敏東、許巍鐘「论台版《辭海》中的「(～)腺」」, 第八次汉字书同文学术研讨会, 2005年7月, 成都
- ・王敏東、許巍鐘「新漢語「甲状腺」の成立について—付: 関連の語にも触れながら—」, 国際シンポジウム比較語彙研究Ⅷ・語彙研究セミナーⅤ, 2005年5月, 125-132頁, 台北
- ・王敏東、許巍鐘「台湾における医学用語について—「扁桃腺」を例として—」, 2005 国際シンポジウム—西洋学問の受容及び漢字訳語の形成と伝播—(予稿集), 2005年3月, 93-100頁, 上海
- ・王敏東、許巍鐘「「扁桃腺」という言葉の成立について 付: 関連語彙にも触れながら」『国語語彙史の研究』二十四, 2005年3月, 320-336頁。(日本)
- ・杉本つとむ『語源海』2005年, 東京書籍
- ・若伊・波特 (Roy Porter) 著、王道還訳『医学簡史』2005年, 商周出版
- ・江漢聲『醫医者の智慧』2004年10月, 天下文化。(台湾)
- ・国立国語研究所『分類語彙表』(増補改訂版) 2003年
- ・「碧素 (ペニシリン)」と「科学朝日」

<http://www.warbirds.jp/prince/pr0012.html>, 2002年

- ・岩月賢一『語源瑣談』2001年, 東京医学社
- ・日本国語大辞典 第二版編集委員会 小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典』(2版), 2001年, 小学館
- ・天野成昭、近藤公久『NTT データベースシリーズ 日本語の語彙特性』(第7巻 頻度① 頻度②) 2000年, 三省堂
- ・文部省、日本薬学会編『学術用語集薬学編』2000年, 丸善
- ・松下正幸『医学用語の成り立ち』1997年, 榮光堂
- ・山崎幹夫『薬の話』1991年, 中央公論社
- ・石坂哲夫『薬学の歴史』1981年4月, 南山堂
- ・立川清『医語語源大辞典』1976年, 国書刊行会
- ・日本科学史学会『日本科学技術史大系 第24巻・医学<1>』1970年, 第一法規出版株式会社
- ・緒方知三郎『常用医語事典』1968年, 金原出版
- ・国立国語研究所編『分類語彙表』1964年, 秀英出版
- ・日本学士院日本科学史刊行会『明治前日本薬物学史』1957年, 日本学術振興会発行
- ・尾持昌次編『常識医語集 III和独英篇』(第二版) 1947年、明倫堂書店
- ・今井「敵米英最近の医学界 チャーチル命拾い ズルホン剤を補うペニシリン」『朝日新聞』1943年1月27日
- ・伊藤晃二『常用モダン語辞典』1933年(松井栄一他監修『近代用語の辞典集成』1994年, 大空社)
- ・『医学名詞彙編』1931年
- ・吳建原『丁氏医学叢書 中外病名對照表』1919年, (上海) 医学書局
- ・伊地知英太郎、新宮涼園纂輯『袖珍医学辞彙』1886年, 伊藤誠之堂
- ・奥山虎章『医語類聚』1872年, 名山閣
- ・合信(BENJ. HOBSON)『醫學英華字釋 MEDICAL VOCABULARY IN ENGLISH AND CHINESE』1858年, SHANGHAE MISSION PRESS (上海)
- ・『四庫全書』(文淵閣本)

謝辞：本研究は住友財団の援助（2005年度「アジア諸国における日本関連研究助成」）をいただいた。ここに記して厚く御礼申し上げます。